

二宮尊徳と大原幽学

～その思想と実践～

調査研究部 高木 英彰

1. はじめに

二宮尊徳（1787－1856）と大原幽学（1797－1858）は、江戸末期、貧困による農民の逃亡、天保の大飢饉、支配者層の財政難と全国的な苦難を迎えた時期に、関東を舞台に農村の立て直しに貢献した農政家・思想家である。同時代に生まれたこともあり彼らの業績や思想は比較されることも多い。本稿では彼らの活動・思想について、限られた資料の中からではあるが、現代の協同思想との関連を押さえながら紹介したい。

2. 生涯の概要

二宮尊徳は相模国栢山村（現在の神奈川県小田原市栢山）の百姓利右衛門の子として生まれた。少年時代に酒匂川の氾濫により田畑を流された。その際、村民と堤防工事に働く傍ら、寸暇を惜しんで習字や学問に励んだエピソードは周知のとおりである。後、家を復興させた手腕を小田原藩主大久保忠貞^{ただかね}に買われ、幕府の役人として下野国桜町領（現在の栃木県真岡市）、小田原藩、烏山藩、日光神領など関東の各地で藩、村、個人を対象とした救済にあたる。日光神領復興に取り組む最中に70歳で没した。これらで用いた手法と思想は『報徳仕法』と呼ばれ、尊徳の死後も報徳社や一元融合会といった団体により全国各地

への普及が進んだ。

一方、大原幽学は尾張藩士大道寺家の出とされている。18歳のとき（1814年）に生家を勘当されて以来34歳（1830年）まで関西方面を漂泊している。その間のことはよくわかっていないが、東海道中膝栗毛よろしく、面白おかしい旅をしていたようである（高橋2005）。34歳の時、近江国（現在の滋賀県）伊吹山松尾寺の提宗和尚^{ていそう}の激励を受けて、人々の教化を志す。信州上田と小諸で講義を開く¹が、上田藩の嫌疑を受けた為に江戸へ抜け鎌倉、浦賀と歩き、房総に至る。名主遠藤伊兵衛に依頼され、荒れ果てていた長部村（現在の千葉県旭市長部）に入る。3年間の村民との信頼づくりを経て農民、商人、名主から成る先祖株組合を結成する（1838年）。これはロッチデール公正先駆者組合（1844年）の設立より早く、そのために「世界初の協同組合」とされている。一時は模範村として領主清水家²に表彰されるが、道友（門人）増加に伴い建設した教導所「改心楼」が幕府の嫌疑を招く³。牛渡村事件（改心楼乱入事件）⁴により江戸での取り調べ5年、押込100日を受け長部村に帰るが、幽学不在の間、弾圧もあり元の荒れた姿に戻っていた村々を見て、長部村の墓地にて自刃する（62歳）。尊徳にも小田原仕法の際に藩から疎まれた事はあったものの、

1 この時は農民指導ではなく、中流以上の商人層相手に家や子育てに関する教化活動を行っていた。

2 御三卿。この地域は天領であった。

3 工事に二十数か村の村民を動員したこと、大がかりな建造物であったこと、しかも幕府の許可を得たものでないことが、反体制教団と疑われる原因となった（高橋2005）。

4 博徒等が改心楼で暴れた事件だが、関東取締出役の差し金とされる。

最終的には世に認められた。他方の幽学が幕府に睨まれ悲劇的な結末を迎えたのは、生家を勘当され身元がはっきりしない立場であったことが大きな原因とされている。

3. 評価の変遷とその背景

二宮尊徳、大原幽学、および現在の協同組合の間にある共通点と差異に触れる前に留意すべきことがある。それを指摘するために、両者の一般的人物像がこれまでどのように形成されたものかも示しておきたい。

二宮尊徳が全国的な知名度を誇る理由として、大正13年以降、各地の尋常小学校に二宮金次郎像が設置されたことが挙げられよう。それは日露戦争後、困窮する農村の立て直しのために実施された官製の地方改良運動の中で、報徳社が報徳思想・仕法を積極的に普及させたことが関係している。一方、大原幽学は明治末期には東総等の狭い地域でしか知られていなかったものの、彼もまた、田尻稻次郎（1916年東京市長、貴族院勅撰議員）により、地方改良運動の支柱として世に出ることとなった（木村1981）。すなわち、両者は地方農村を指導し、領主の経営を立て直した人物として、見習うべき「国家主義者」のモデルとされていたことになる。

時代を下って昭和に入ると、ロシア革命に触発された共産主義者・高倉輝が、幽学を「世界最初の産業組合の創始者」とした（前掲木村）。第二次世界大戦敗戦後は、尊徳信奉者が尊徳をGHQの追及から匿うために民主主義者として評価を一転させているが、さらにそ

の後には再び封建体制擁護者として評価を翻している研究者もいるという（稲葉2010）。

このように、尊徳と幽学はともに疲弊した農村の救済の立役者であると同時に優れた思想家であったが故に、研究者の要請に合わせた解釈が為される傾向が強かった。そうした態度は尊徳や幽学の思想の都合のよい一部分を取り出すことにつながり、全貌を窺う妨げになる。尊徳研究においても幽学研究においても当時の社会背景に立ち戻った分析とその蓄積が現在も求められている⁵。

以上のことに留意すると、意識的に彼らに協同思想の源を見出さんとするスタンスは、尊徳と幽学の全貌を捉える上で障害となる。実際、彼らの思想や業績は現代の協同思想に一致したり内包されたりしているわけではなく、独自性が強い。そのため本稿では、相互扶助制度の始まりや協同思想の源流といった視点から彼らの業績を評価しないよう留意している。ただし、彼らの思想と部分的な重なりしかもたないとしても、それが即座に協同思想の礎であるという主張を否定することにはならないことはお断りしておく。

4. 二宮尊徳の思想とその実践

一 報徳仕法

報徳仕法と言え、実践方式だけでなく思想も含めて指すようである。『報徳』は大久保忠真が「汝の道は以德報徳⁶に似たり」と言及したことによる。ここで「徳」とは「宇宙の存在する全てのものにそれぞれに備わっている長所」のことであり、その恩恵を活用す

5 そのような取組みが皆無なわけではなく、優れた研究の蓄積は当然存在している。例えば本文中で紹介している木村礎氏(故人)は、イデオロギーが濃厚な先行著作が多い中、アカデミズムの立場から大原幽学を冷静に分析し、膨大かつ詳細な調査成果を提供されている。

6 論語の一節。文字通り、「他者から受ける徳には徳で返す」の意。

ることで「報」いることとされている（大貫2010）。表現を変えれば、「自然（天道）に対して、人（人道）が理（法）を知ってそれを生活に役立てなければならず、役立てることが出来る」という自然に対する人間の関係性を示しているとも言える（稲葉2010、姚2009）。

その関係性の下で、尊徳が説くあるべき人道のキーとなる要素が「至誠」「勤労」「分度」「推譲」である。「至誠」「勤労」を文字通り「真心」と「勤勉に働くこと」と読むならば、これは一般的に求められる道徳であって、取り立てて報徳仕法の特徴とするようなものではない。次に「分度」とは「現在利用可能な能力（具体的には生産能力や家計）を知り、その範囲内で生きること」と解釈されている。

「推譲」は仕法の最終目標というべき要素で、将来や子孫への富の分配（「自譲」、いわば貯蓄）と他人や社会への分配（「他譲」）を勧める道徳である。現代の協同思想ないし相互扶助精神に重なるのはこの他譲であろう。ただし以上のように各要素を把握すれば、四要素のなかでも分度こそが仕法の在り方を規定していたとする前掲稲葉の指摘は説得力を持つ。

では、分度はどのように具現化されたのであろうか。農業経営においてそれは、客観的な調査に基づく収入額（収穫量）の把握から始まり、支出配分を決めることであった。それはすなわち、支配者層たる武士階級に上納額の譲歩を迫ることである。そもそも当時の農民の逃亡は苛烈な年貢の取り立てがひとつの要因であり、それが武士階級の収入減少へと跳ね返っていた。具体的には農民の食と再

生産を確保したうえで上納額を決定したと推測され、桜町仕法の例では農民生活の安定と、越後周辺からの移民誘致でもって上納額を向上させ武士階級を納得させたようである。ただし、あくまで尊徳の視点は年貢の完納という支配者層に沿ったものではなく、窮乏する農民の救出にあったことは明白である。小田原領内に18種あった計量升を1俵＝4斗1升の升に統一したのも、支配者層のごまかしにより1俵＝4斗3升として過剰に接收されていたそれまでの農民不利の状況から、武士側に譲歩を迫ることに目的があった⁷。ここでも、尊徳を（幕府の役人として活躍したことをもって）封建体制の支持者とするよりは、むしろ封建体制の矛盾を暗に指摘し反抗することが尊徳の思想の本質であるとする稲葉の主張は筋が通っている。

5. 大原幽学の思想とその実践

—性学と先祖株組合

武家出身であり、また人生の多くを中流の商人などを頼りながら放浪に費やした幽学が、どこで農業や農民事情を詳しく学んだかはわかっていない。彼は生家を勘当された際、父から武士としての訓戒を言い渡され、それを胆に銘じて生きたと言われる。思想家としての幽学は当初、商人など中流層相手に「家永続」を目的とした講義を行っていた。その目的自体は長部村に入っても変わるわけではない。その手段ないし過程として核となる倫理が「人心道心説」「分相応」「孝行」である。幽学は尊徳と異なり、あらゆる人は天地と人を混在させている。人心とはわが身のみを考

7 1升多くしたのは、武士側の譲歩を得るため（大貫2010）。それでも農民は2升分の勝利を得たことになる。

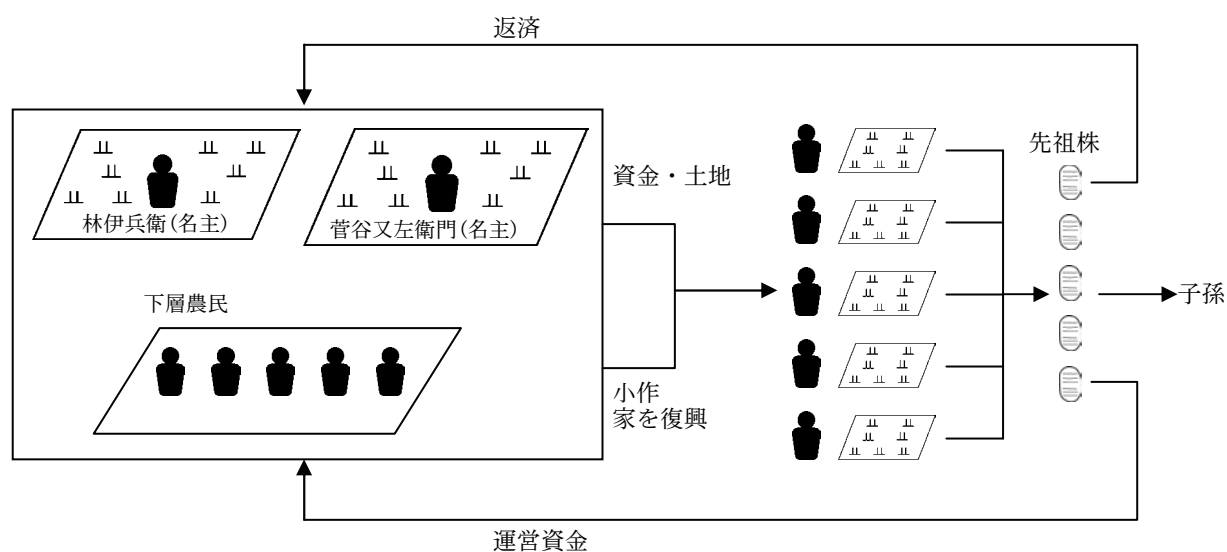
える「人欲」であり、道心とは他者のみを考える「天道」である。いかなる賢者も人心強き者に交われば人心に寄るとし、道心の強き者と交わり、「分相応」に暮らし、親に孝養を尽くすことを要請している（前掲姚）。また、この点も尊徳とは対照をなすが、「素性不明の人物でありながら怪しげな教義を広めた」として糾弾された幽学の方こそ、幕藩体制、封建制を積極的に肯定していたようである。長部村で農民たちと暮らしの上でもなお、彼は父から要請された武士としての生き方にこだわっていたことが推察できる。

こうした道徳を「性学」と呼び、それを経済と調和させる形で実践的にしたものが「先祖株組合」である。幽学は長部村を拠点とし、複数の村で先祖株組合を創設した（少なくとも9か所。長部村の場合、約30名の村民のうち25名が組合員となった）。農民を中心とした組合という点では世界初の農業協同組合ということになる。

先祖株組合の核として、組合員には農地の一部（一人5両分）を提供させ共有財産化し、そこから上がる利益は組合が確保し、将来世代への貯蓄、潰百姓の復興、質流れとなった農地の買い戻しに充てるようにした（下図）。すわなち相互扶助の制度化である。ここでは将来世代への貯蓄が優先であり、潰百姓がただちに救済されるわけではない。「一定額の貯蓄が無い限り、潰百姓が現れても救済してはならない」と厳しく取り決められていた。

また、民主的な合意に基づく耕地の整理・交換や家の移転等の村の改造や、自給肥料の推奨、日用品の共同購入、幽学に共感する名主による信用事業も行った。幽学は、農業経営の改善のみでなく、女性や子供にも家の中での役割があるということを教育するため婦人会や子供会を設置し、性学に基づく生活全般の教化を村に浸透させていった。こうして先祖株組合は村の農民・商人らを組織化することで彼らの生活を改善し、周辺の困窮する

図 先祖株の仕組み



(出所) 大原幽学記念館所蔵資料を元に筆者作成。

村で特に好意的に受け入れられることとなった。

6. 尊徳・幽学死後の動向

尊徳死後の報徳思想については既に述べたとおり、富田高慶や安居院庄七⁸といった弟子達が事業を継ぎ、大日本報徳会や一元融合会による普及へとつながっていった（若槻2009）。ただし稲葉はここでも、第一の高弟である富田ですら尊徳の農民視点の思想を理解せず、為政者の立場から手法ばかり引き継いだと糾弾している。

幽学が興した性学は、遠藤良左衛門が二代目教主となって引き継がれる⁹が、この時点で権力による威圧を受け国家主義的思想に変質している。また、幽学時代には性学入門にも時間をかけて適正審査を行ったにもかかわらず、この時期はそれが簡略化され急激に道友が増加したことを神文の数¹⁰から木村が指摘している。三代目石毛源五郎の時代になると性学の解釈を巡って二つの派閥に分離し、対立・激突するに至った。対立は反石毛勢力の勝利に終わり、彼らの組織した八石性理学会は、現在も性学活動を続けている。

さて、現代の協同組合とのつながりであるが、明治～昭和期に国家主義モデルとして復活した2つの思想が産業組合の理念形成に影響した可能性は十分に考えられる。その点で彼らを日本の協同組合の起点とすることはできよう。しかし、上述の事情を踏まえるに、彼らの思想はかなり早い段階に変質しており、元来の思想が今日の協同思想の礎になっ

ているという仮説を明白に正当化することはできない。

前もって断ったように、尊徳研究・幽学研究は依然発展過程である。真の彼らの実態に迫ることを願ってさらなる研究の蓄積を待ちたい。

（参考文献）

- ・稲葉守（2010）『尊徳仕法と農村振興 ―現代に生きる変革の精神―』農山漁村文化協会
- ・大貫章（2010）『二宮尊徳の生涯と業績 ―報徳司法の理論と実際―』幻冬舎ルネッサンス
- ・木村礎（1981）『大原幽学とその周辺』八木書店
- ・佐々井信太郎（2007）「報徳生活の原理と方法 ―平和に生きる道―」『現代版報徳全書第4巻』一元融合会
- ・高橋敏（2005）『大原幽学と幕末村落社会改心楼始末記』岩波書店
- ・若槻武行（2009）『協同組合の原点「報徳」を広めた安居院庄七』東京六法出版
- ・姚奇志（2009）「二宮尊徳の思想 ―大原幽学との比較を中心にして―」『神戸女学院大学論集』Vol. 56 No. 1

（謝辞）

二宮尊徳調査では二宮尊徳記念館の皆様と松下雅雄氏に、大原幽学調査では大原幽学記念館の皆様と五木田守夫氏に解説・助言等をいただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

8 富田高慶（1814-1890）は相馬藩士斎藤嘉隆の次男で尊徳の一番の高弟。安居院庄七（1789-1863）は秦野出身で家職は大山阿夫利神社の修験者。50歳を過ぎてから尊徳に弟子入りし浜松に3番目の報徳社を設立する。

9 遠藤良左衛門は伊兵衛の跡取り。名主の身分が明確であったため、幽学と異なり指導者として幕府からも認められた。

10 ここでの神文とは、性学への入門誓約書である。正確な道友数を示すものではないが、凡その規模はここから推定できる。